

特集 ブックレビュー 「戦後70年」について

本研究会では二〇一四年から一五年にかけて「戦後70年」連続ワークショップ（I-VII）を、一五年末に国際会議「核・原爆と表象／文学―原爆文学の彼方へ―」を企画・開催した。第五〇回例会では二〇一五年に刊行された会員による二冊について書評会を行った。本特集はこれらに関連した誌上企画である。

戦争・被爆体験者の高齢化、福島原発事故による様々な影響、安全保障関連法をめぐる攻防、世界で続発するテロ事件などがあ
る中、戦後七〇年目の二〇一五年は戦争・原爆関連の書籍が数多く刊行された。ここではその中から核・原爆に関する一二冊を選んだ。いわゆる文学以外の、社会学・歴史学・芸術分野も含めて
いる。これについては、連続ワークショップの狙いである「核・原爆に関わる思想、表現、運動を問い直」し、「戦後」の再審に
迫ろうとする」（本誌一三号）ことや、国際会議における「核や原爆にまつわる表象／文学は、どのような歴史的、社会的条件のもとで生み出され、読まれ、位置づけられたのか」（国際会議の趣旨）

という議論を引き継いでいる。また、どれか一冊を手にとれば分かるように、アクチュアルな問題意識に貫かれた領域横断的な研究成果になっており、戦後七〇年以後の「原爆文学」あるいは「原爆文学研究」について議論を広げたり深めたりする上で資するものと考え、これらを取り上げた。

各本についての書評はすでに新聞各紙、学会誌等で出ているが、今回まとめて取り上げることで、それぞれの研究の独自性や、他の研究との重なりが見えやすくなるのではないかと考える。また、個々の書評については、単なる内容紹介ではなく、研究書の成果と課題を具体的に浮かび上がらせ、今後の議論の導きとなるような批評として企画した。個々の書評の論点が結びつき、読者に新しい視点をもたらされることを編者として期待したい。

なお本特集は、科学研究費補助金（基盤研究B「核・原爆と表象／文学に関する総合的研究」、研究課題番号Ⅱ 20284038、研究代表者Ⅱ川口隆行）による共同研究の成果の一部である。（楠田剛士）